

鹿利用

大通ルベシ共覺エズ、略○中サテ此山ニハ鹿ハ無カ、彼惡所ヲバ鹿ハ通ラズヤト問給フ、鹿コソ多ク候へ、世間寒ク成候へバ、雪ノ淺リニ食ントテ、丹波ノ鹿ガ一ノ谷へ渡リ、日影暖ニ成ヌレバ、草ノ滋ミニニ臥サントテ、一ノ谷ヨリ丹波へ歸候也ト申ス、略○中御曹司ハ是ヲ聞給ヒ、殿原サテハ心安シ、ヤラレ鷲尾鹿ニモ足四、馬ニモ足四、尾髪ノ有ト無ト、爪ノ破タルト圓キト計也、西國ノ馬ハ不知、東國ノ馬ハ鹿ノ通ル所ハ馬場ゾ、打テヤ殿原トテ、略○中北ノ山ノ下ニゾ至リケル、

〔古今著聞集十六興言利口〕前大和守時賢が墓所は、長谷といふ所にあり、そこの留守する男く、りをかけて鹿を取ける程に、或日大鹿か、りたりける、此男が思ふやうく、りかけて取たらんいとねんなし、射殺したりといひて、弓の上手のよし人にきかせんと思ひて、く、りにかけてたる鹿にむかつて、大かりまたをはげて射たりける程に、其箭鹿にはあたらすして、く、りにかけてたりけるかづらにあたりければ、かづらはきれて鹿は事ゆえなく走り、にげて行にけり、此男かしら、がきをすれども、さらに益なし、

〔本草和名十五禽〕白膠一名鹿角膠、和名加乃都乃々爾加波、

〔本草綱目譯義五十一〕鹿略○中

鹿ノ角ヲ製シテ膠ニスルヲ鹿角膠、又白膠トモ云、前ノ角膠ト製スル人ノ名ヲ書タルモアリ、今不然、藥店ニハ牛皮膠ト此角膠ト混ジテアリ、牛皮膠ハニカハ、鹿角膠ハ酒制スルガヨシ製法與ニアリ、是ヲ煮テ和ニシテ粉ニシタルヲ鹿角霜ト云、又日本ニテハ角直ニ焼テ角石ト云、色白シ、眼科ナドツカフ、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

- 攝津國卅四種略○中 鹿角四具略○中
- 丹波國卅三種略○中 鹿角一具略○中
- 播磨國五十三種略○中 鹿角一具略○中
- 美作國卅一種略○中 鹿角一具略○中
- 備中國卅二種略○中 鹿角二具略○中
- 讃岐國卅